

丸の内オフィス街に関する街並みの研究

丸の内オフィス街の変遷をととして

0026 石井秀明

指導 高宮眞介教授

佐藤慎也助手

はじめに

2002年に新生丸ビルが、今までの丸の内の統一されていたボリューム、スカイラインを崩して誕生した。今まで統一されてきた街並みを崩すことに僕は疑問を感じた。

しかし、丸の内の歴史を見てみると、一つ基準となる建物ができて、それを基準、布石として街並みが統一され、完成すると、また時代の需要や要請にこたえるように、また海外からの最新の工法や施工技术などの技術革新によって、次世代を担う建物が出現し、街並みとしてはバラバラの新旧混在期がきて、個々のビルが進化し、その時期の集大成のビルができるとそれを基準として街並みが統一されていくといった規則性を持ったスパイラルのように発展していくと仮定することができると思う。今の時期は混在の時期に入って、統一の時期の前段階ではないか。

本論は、丸の内の街並みの変遷を軸に、その背景にある建築家の思想や社会背景等とともに追うことによって、自分のたてた仮定を明らかにすることを目的とする。

各節の概要

1. 丸の内の誕生 赤煉瓦街の形成

1.1 一丁ロンドンの誕生

丸の内オフィス外の第1号である第1号館は、明治25年1月に着工した。この第1号館はその後の一丁ロンドン、仲通りの基準、布石となる。第1号館から第3号館までストリート性と街並みの統一が強調され、建築のスタイルには違いがあるものの軒線は統一された建物が馬場先通りに並んだ。

1.2 一丁ロンドンの拡張と街並みの統一

第3号館の竣工から約5年後の明治34年7月に第4号館が着工し、ほぼ同時期に第5号館から第7号館まで着工される。いずれも曾禰達蔵の設計によるもので、馬場先通りのストリート完成させる。軒線をそろえながらも個々の建築のスタイルをかえ、個性を出したコンドルに対し、その名作をつなげ、通りとして統一感を出そうとした曾禰の派手ではないがうまくまとめるという手腕が発揮されているといえる。第6号館と第7号館は馬場先通りには面さず、馬場先通りと直交して走る脇道程度であった仲通りに建てられ、仲通り方向への拡張の第一歩となる。統一性を保ちながら赤煉瓦街は通りを中心として拡大されていく。

1.3 仲通りの統一、そして三菱赤煉瓦街の完成

第6、7号館の完成以降、その並びの仲通りの両側に第8号館から第11号館まで相次いで竣工する。この建物の設計は保岡勝也である。仲通りのビルは向かい合うビル同士がファサードを同一に設計され、左右に同じ街並みが並んだ。それぞれの建物の平面は違うが同じ印象のファサードが寄せられ、ファサードの同一化に努力され手間をかけていることがわかる。ここでの保岡の個々の建物よりも街並みの統一、ストリート性の強調を意識したデザインの思想と手法は今日の丸の内の街並みの手法に継承されていることがわかる。

明治44年竣工の第13号館が最後の煉瓦造建築であり、それにより三菱赤煉瓦街が完成する。

2. 新旧混在の時代

2.1 煉瓦造から鉄筋コンクリート構造への移行、技術革新

明治期の赤煉瓦街が完成して、次に計画されたのが第14号館から第20号館である。明治末期に鉄骨構造、鉄筋コンクリート構造といった新技術の大きなうねりが海外から押し寄せ、保岡もそれに乗じて丸の内に初めて鉄筋コンクリートを採用した。赤煉瓦街に準じるのではなく次の本格的な鉄筋コンクリート建築への橋渡しとなる建築群となった。従来の3階建てが限度であった煉瓦造にかわり、アメリカ式の鉄骨造や鉄筋コンクリート造の合理的なオフィスビル工法は、エレベーターの導入もあり、事務所建築の大型化、高層化を加速させることとなる。これまでの完成し、統一された赤煉瓦街はその技術革新の波にのまれ、新旧が混在しボリュームもばらばらの過渡期の時期へと突入する。街並み全体としての統一性、美しさには欠けるが、個々のビルが次々と新しいスタイルで登場し、個々のビルに特徴があるといえる。その中で大正3年に竣工した第21号館は丸の内では最初の本格的な鉄筋鉄骨コンクリート造建築で、次世代を予感させる、アメリカ式オフィスビルの平面プランをもつ革新的な新たな第一歩を踏み出した布石となる建物である。その後の三菱仮本社、仲15号館でもアメリカ式プランが導入され鉄筋コンクリート造も定着し過渡期の終わりが見えてくる。

2.2 大正の過渡期の集大成であり、昭和の大改造の基準となる丸ビルの建設

まだまだ街並みについてではなく個々のビルが進化を遂げている時期であり、集大成ともいえる度肝をぬく規模のビルが計画される。丸ビルは三菱、丸の内にとっての転換点であり、次世代の丸の内の街並みを計画する上でも大きなくさびとなっている。イギリス式からアメリカ式へ、低層から高層へと大正の変革が機を熟したかたちで丸ビルの計画へと移った。これまでの丸の内の事務所建築をはるかに上回る規模の丸ビルが実現できたのはフラー社の存在、つまりアメリカ式の最新の建築施工技术の導入があったからである。また、フラー社との出会いは最新の工法だけでなく、最新のアメリカ式オフィスビルの合理的プランや思想なども三菱地所部の建築家に大きな影響を与えたと考えることができる。ここで大きくアメリカ式へと動き、本格的なアメリカ式オフィスビルの次世代の布石、基準となるプランが実現した。アメリカ式との直の出会い、直接仕事を共にし、直に触れることができ、指導を受けたことは大きく三菱の丸ビル計画に影響しただけでなく、その後の昭和の大改造にもこのときの考え方や影響が根底に流れている。本当に丸の内の変遷において大きな出会い、前進、転換ととらえることができる。このことは今後の戦後昭和期のオフィスビルの基準となり、街並みの作り方や街区の編成にも大きく影響を及ぼしていると思われる。

2.3 丸ビル完成後から昭和戦前まで

丸ビルの完成後関東大震災の復興や金融恐慌による不景気、世界恐慌など昭和初期は暗い話題が多く、大正時代のめざましい発展も丸ビル完成で一息つき、街並みの改造という感じでもなく時代の要請に応じて単体での建築が建てられる。また明治生命館が昭和9年に竣工し、第2号館が取り壊されて明治時代の「三菱村の四軒長屋」の一角が姿を消し、馬場先通りの景観は当時では桁違いのボリュームの出現により一変した。大規模なビルの出現で明治時代の建築は影を潜めはじめ、もはや様々なボリュームの建物が立ち並び、街並みはでこぼこでばらばらな状態である。

3. 戦後、再び丸の内街区の大改造による街並みの統一とビジネスセンターの完成

3.1 戦後復興から、高度経済成長へ大型ビルの建設

第2次世界大戦が終わり、戦後復興が急がれた。すぐに仲通りや馬場先通りが改造されていったのではなく、景気の上昇や復興の一段落、新生三菱地所の誕生等大改造に向けて着々と準備が整っていくこととなる。三菱地所にとって戦後最初の大工事となる東京ビルヂングの建設を皮切りに永楽ビルヂング、戦後復興の象徴でもあった新丸ノ内ビルヂングと昭和26年から27年の間に立て続けに合計延べ床約4万坪のビルを新築した。そして昭和28年5月7日三社が合併し、「新生」三菱地所株式会社が成立する。戦後経済が終焉を迎え、経済は急速に回復し高度経済成長期へと入る。それに合わせ、大手町ビル、新大手町ビルをはじめ次々と大型ビルの建設に着手し、近代化への道を歩み始める。そして後の赤煉瓦建物を建て替える「丸ノ内総合改造計画」へと発展していく。

大手町ビルは、鉄骨鉄筋コンクリート造、地下3階地上9階建て、延床面積3万3,660坪の東洋一のマンモスビルで、従来の三菱地所にみられない特徴をもち、その後の三菱地所のビルの指標ともなった。

3.2 丸ノ内総合改造計画第1段階

3.3 丸ノ内総合改造計画第2段階

3.4 丸ノ内総合改造計画総仕上げ

明治期の第1号館が建ち、馬場先通りの赤煉瓦街から仲通りに移り街並みの統一とストリート性を重視しながら赤煉瓦街が拡大、発展していき、大正の技術革命によって一つ一つビルが建っていく毎にビルの規模、設備が進化するという目まぐるしいオフィスビルの進化をとげた。その頃はボリュームもばらばらで街並みとしては統一されていない状況のなか大正期の集大成として丸ビルが完成した。そして戦後復興も終わり、昭和の高度経済成長期に入り、ビル需要が増え、丸ビルと同等、それ以上の規模のオフィスビルが建てられ、いよいよ老朽化した丸の内本丸である赤煉瓦街の再建がスタートする。大正時代のように技術革新やアメリカ式オフィスビルへの転換のような個々のビルの進化ではなく、高度経済成長で経済が発展し、とにかくビル需要に対してオフィス床面積を確保すること、老朽化した赤煉瓦街を再び近代的なオフィス街に蘇生させるといった街づくりに重点が置かれていたことがわかる。そこで明治期の街づくりの手法が継承されている。ストリート性の重視と街並み全体の統一性など、明治期とリンクするところがある。軒線が統一され、統一されたボリュームで次々と赤煉瓦ビルが取り壊され

た跡地に建設された。新しい街区の構成として、丸の内は約3,000坪を一つのブロックとして区画割りされており、そのブロックに私道が走り数棟の建物が建っていたが、一つの大きな街区に集約してそこに大型オフィスビルを建設することとなった。この一区画の大きさは丸ビルに相当し、丸ビルが計画された時はこの構想はなかったと思われるが、十分に丸ビルは次世代を予想した規模であったし、この大改造の基準、布石となっている。昭和48年、三菱ビルの完成によって、丸ノ内総合改造計画はほぼ完了することとなった。昭和34年にスタートして以来、30棟を数える古い建物を取り壊し、その跡地に13棟の近代的なビルが建設された。迷いもなく次々とボリュームもスタイルも明治と大正の混合されていた街並みが改造され、軒線もボリュームも統一された。そしてファサードもほぼ統一され、柱のグリッドもほぼ統一されたオフィスビルが出来上がった。施工技術の進化、高度経済成長による借室需要の急激な増加もあり、明治期よりも速いスピードで街並みが完成していった。

4. 現在の丸の内再構築

今新生丸ビルが誕生して丸の内のスカイラインを塗り替えるボリュームのビルが建ちはじめている。また新旧混在の時期が訪れている。

完成され、統一された街並みを崩すかたちで超高層ビルの新生丸ビルが建設された。そして、東京ビル高層化建て替え計画、明治生命館街区再開設計画、丸の内1丁目1街区開発計画など昭和前期のように本丸の丸の内街区に手を付ける前に周りのオフィスビルから再開発をしているところも規則性ととらえることができる。

しかし、全く街並を崩しているのではなく新しく建った丸ビルも仲通りの既存の壁面線、軒高に合わされ、街並みの統一が図られていることがわかる。今回は街区の規模はかわることなく、壁面、軒高の統一は昭和のスタイルを継承し、上への革新、超高層へのスタイルの変化が大きな特徴といえる。

統一を継承しつつもあらたに上へのボリュームの増加により、しばらくは新旧混在の時期であると考えられ、街並みのスカイラインの統一はもう少し先になると思われる。この新旧混在の時期に、オフィスビル自体のスタイルや低層部のスタイルを変えるような革新的なビルが誕生してもおかしくない時期に突入していると考えられている。

5. まとめ

丸の内は規則的に、そしてスパイラルのように統一と混在を繰り返しながら継続的に発展、進化をとげていると考えられている。今の丸ビルの出現もそのスパイラルのながれの一部とみなすことができるといえる。

参考・引用文献一覧

- [1] 三菱地所社史 「丸の内百年のあゆみ」 上巻、1993年
- [2] 三菱地所社史 「丸の内の百年のあゆみ」 下巻、1993年
- [3] 藤森照信 「丸の内をつくった建築家たちーむかし・いま」 『新建築 建築家シリーズ 三菱地所』、1992年
- [4] 河東義之 「丸の内オフィス街の形成と三菱の建築」 『都市と保存 保存の経済学』、1974年5月号
- [5] 『新建築』、2002年10月号